

平成30年度 8020 公募研究報告書抄録（採択番号：18-2-03）

研究課題：8020 と長寿について、口腔細菌叢と腸内細菌叢に関する研究
～京丹後長寿コホート研究における医科歯科連携～

研究者名：山本俊郎¹、渡邊能行²、的場聖明³、金村成智¹

所 属：¹京都府立医科大学大学院 医学研究科 歯科口腔科学

²京都府立医科大学大学院 医学研究科 地域保健医療疫学

³京都府立医科大学大学院 医学研究科 長寿地域疫学講座

目 的

我が国は、80歳以上で20歯を有する者（8020達成者）の割合が40%を超えるようになった。歯の喪失の防止は、寿命の延伸、すなわち長寿に貢献することが示されている。また、医科では健康寿命の延伸には、腸内細菌の役割について報告されている。口腔から *Porphyromonas gingivalis* を投与すると、腸内細菌叢が変化するとともに、腸のバリア機能が低下、炎症を誘発する。また、炎症性腸疾患の患者唾液には *Prevotella* 属の細菌が多く、口腔細菌叢の乱れに炎症性腸疾患が関与する可能性もある。

そこで本研究では、我が国最高の長寿地域（京都府京丹後市）の高齢者の口腔細菌叢と腸内細菌叢に着目、8020達成者と未達成者や腸内細菌叢を中心に医科の様々な全身データと歯科データの分析を行う。

方 法

口腔細菌叢検査を中心に8020達成者と8020未達成者のコホート研究を実施する。健診項目は、口腔の健康に関するアンケート、口腔内診査、口腔細菌叢検査、咀嚼能力検査、唾液検査、舌・口唇運動機能、そして、腸内細菌叢検査、血液検査などを実施、検討を加えた。

結 果

8020達成者はう蝕菌や歯周病菌の保有数が少なく、うち一部の症例においては腸内細菌の短鎖脂肪酸やγ-アミノ酪酸産生菌の保有率が高かった。また、8020未達成者は8020達成者に比べて咀嚼能力の低下を認めた。そして、体重、栄養状態（総タンパク質、血清アルブミン）、骨密度には差がみられなかった。

考 察

8020達成者は口腔内の細菌環境が良好であるとともに、腸内環境も良好である可能性が考えられた。そして、8020達成は口腔機能の廃用症候群を防ぐ一助となっていた。今後、ライフステージに応じた口腔機能管理は、全身の健康にとっても重要である。